

二〇二三年度

一般入試① 問題(国語)

注意書き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから一八ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくかったりする場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

「、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。」

主人公の「想」は小学四年生。父と「本当の母さん」は二年前に離婚し、今は「新しいお母さん」の「渚さん」と、最近生まれた弟「海君」と父の四人で暮らしている。渚さんは想にもやさしかったが、ある日育児の疲れからか、ドアの内側から扉が開かないようにするドアガードを外し忘れ、想を閉め出してしまった。想はたまたま同じフロアに住む「おばあさん」に救われたが、その後も、毎日午後五時までドアガードを外されなくなってしまった。

「また、あなた！」

ふり返ると、あのおばあさんが立っていた。

「部屋に一緒に行きましょうか？」とおばあさんは言ってくれたけれど、僕は抵抗した。

「赤ちゃんが夜中に泣くから、母さんが寝られないんです。だから、昼間は二人を寝かしてあげたいから。僕、夕方までここにいます」

1 「大人みたいなことを言うんじゃないやありません！」

怒ったようにそう言うと、おばあさんはそう言ったことを後悔したみたいに唇を軽く噛んだ。そうして何か考えるふうになり、こめかみに手をあてた。今日は爪に青みがかかったピンク色のマニキュアが塗られていた。

「……仕方がない。私の部屋で待つか」

えっ、えっ、と僕が言っているのに、おばあさんが僕の腕をとる。おばあさんの部屋に行ったら、またやっかいなことになるような気がしたけれど、おばあさんの力は強い。僕は引き摺られるように、おばあさんの部屋の前に連れてこられた。おばあさんが部屋のドアを開ける。ドアのところに吊された鈴のようなものがちりり、と音を立てた。

おばあさんが僕の背中の中のランドセルをもぎ取るように下ろす。そして、ランドセルを廊下に置いた。リビングに入ると、なにかのにおいが強くした。でも、変なにおいじゃない。

おばあさんの部屋の間取りは僕たちが住んでいる部屋よりも狭かった。リビングの真ん中に大きな木のテーブルがあり、

その上に古い本が崩れそうに重なっている。壁際は全部本棚で、その前に描きかけの絵がいくつもあった。これは多分、油絵の具で描いた絵。においの正体はこの油絵の具だ。僕は、描きかけの絵（黒が一面に塗られているだけでなんの絵かわからない）を見、本棚を見た。そんな僕におばあさんが言った。

「どの本も自由に読んでいいから。貸してあげることができないけれど」

「あの、手を洗わせてもらってもいいですか？」

「ああ、そうね。厄介な時代になったもんだ」

そう言うおばあさんの後について洗面所に行き、二人並んで手を洗った。掌に水をためてうがいをしていると、おばあさんがどこからかゾウの絵のついたプラスチックのコップを持ってきてくれた。コップにはマジックで「三四郎」と書かれている。

「死んだ亭主の」とおばあさんは真顔で言った。亭主、というのはおばあさんの結婚相手だった人、ということには僕にもわかる。僕はまた本棚の前に戻った。

「本が好きなの？」

「はい」と答えたものの、ここに僕が読めるような本はないみたいだった。背表紙が黒ずんで本の名前がわからないものもあるし、英語の本も多い。そんな僕を見ておばあさんが言った。

「三四郎の本がほとんどなのよ。死んだあとにこんなに残されてもねえ」²

そう言いながらおばあさんはキッチンに向かう。しばらくすると、おばあさんが銀のお盆を持ってやってきた。ソファに座るようにすすめながら言う。

「まあ、お紅茶でも飲んで待ちなさいな。クッキーもあるわよ」

「いただきます」と僕は言って小さな花がたくさん描かれた紅茶茶碗に口をつけた。

紅茶には砂糖とミルクが最初から入っていて、おいしいな、と僕は思った。小さなドーナツの形をしているクッキーは少し湿気っていたけれど、それでもおいしかった。

おばあさんは僕に構わず、キャンパスの前に座り絵筆を動かしていく。真っ黒、と思ったのは間違いで、絵の下に真っ赤

な炎が渦を巻いている。

「あの日の夜空を描いているの」

僕が何も言わないのにおばあさんは言った。

「あの日の夜空？」

「……そうこれは、戦争が終わった年に東京が燃えた夜の絵」

日本で戦争があったことは知っているけれど、僕にはあまりに遠すぎる事実だった。黙ってしまった僕に気づいたのか、おばあさんが僕に顔を近づけて密やかな声で言った。

「焼夷弾が落ちてきてね、東京の下町はみんな焼けたの」

3 「……しょうい、だん？」

僕の質問におばあさんは違うキャンバスを見せた。銀色の飛行機、芋虫のおなかみなどところがばかっと開いて、小枝みたいなものが空から落ちている絵だった。

「火の雨と同じよ。これが落ちたところはみんな焼けたの」

そう言っておばあさんは、靴下を脱いで僕に見せてくれた。足首に火傷の痕のようなひきつれがあるけれど、それはもうずっと古い傷のように見えた。

「あなたくらいの時かな……これはそのときの」

4 「……」

僕は黙ってしまった。それでも尋ねた。

「あの、なんでこういう絵を描くんですか？」

「……」

今度はおばあさんが黙る番だった。僕は間違ったことを聞いてしまった気がして胸が少しどきどきした。

「さあ、どうしてかしらね？」⁵ 今、描かないとみんな忘れてしまう気がして」

そう言いながら、おばあさんはまたキャンバスに絵筆を走らせる。僕はおばあさんが絵を描くのを邪魔したくなかったの

で、おばあさんの後ろのソファに座り、図書室で借りた『星座の図鑑』を読んだ。おばあさんももう喋らなかつた。僕は時々キャンバスに目をやって、段々と絵が出来上がってくるところを、ただ黙って見ていた。

午後五時になったので僕は家に帰った。

ドアガードは外されている。僕はたった今、学校から帰って来たように、「ただいま」と言うと、やっぱり眠そうな渚さんが「おかえり」と小さな声で言ってくれた。佐喜子さん（帰り際におばあさんと呼ばないでね、と名前を覚えてくれた）のことはもちろん渚さんには言わなかつた。言ったら、また、この前のときみたいにやっかいなことになる。塾に行く時間になるまで、僕は自分の部屋で過ごした。ベビーベッドで眠っている海君にも近づかなかつた。塾に行く時間になると、渚さんがどこかたい表情をして、お弁当の包みを渡してくれた。

「……ありがとうございます」と言うと、渚さんはどこかぎこちない表情で笑ってくれた。

その日から僕は、佐喜子さんの家で時間を潰すようになった。それでもはじめは学校から帰ると、いったんは自分の家に行つて、ドアガードが外れていないか確かめたけれど、やっぱりだめだった。ふーりと長いため息をついて、僕は佐喜子さんの部屋に向かつた。おやつは湿気つたクッキーから、チョコやキャンディやいろんなお菓子を出してくれるようになった。⁶もしかして僕のために買ってくれたのかな、とも思つて、うれしくなつた。だつて、佐喜子さんは僕がこの部屋に来ることを嫌がっていないんだと思つて。僕は相変わらず、古ぼけたソファの上に座り、図書室で借りてきた本を読み、佐喜子さんは絵を描き続けた。あんまりおしゃべりもしなかつた。僕は時々、佐喜子さんの出来上がつていく絵を眺めて、時間になると自分の部屋に帰つた。

「ねえ、東京つて、昔、戦争で燃えたの？」

僕はいつもの図書室で中条君に尋ねた。

「うん。そうだよ、東京大空襲」

そんなことも知らないの、という顔をしないところが中条君のえらいところだ。

中条君が書架の間を歩き回り、一冊の本を僕に見せてくれた。『東京大空襲』という子ども向けの漫画本だつた。ページ

をめくり、中条君が開いたところを僕に見せる。飛行機、じゃなくて爆撃機。東京にたくさん爆弾を落とす爆撃機はB29と言わらしい。佐喜子さんの絵のとおり、B29のおなかから、バラバラと細長い爆弾が町の上に降り注いでいる。「町は一瞬にして、火の海と化しました」という台詞の場面では、大人も子どもも火の海に包まれて苦しんでいる絵があつて僕は怖くなった。そして、佐喜子さんの火傷の痕を思い出した。ここに十歳ぐらいの佐喜子さんがいたのか……と思つたら、な

ぜだか僕の足も火傷をしたみたい鈍く痛んだ。

「一晩で十万人以上の人が死んだんだ」

「えっ、そんなに!？」

「でも、戦争ってそういうことだから」

平然と中条君は言う。

「怖いなあ」

言いながら、馬鹿みたいな感想だと僕は思った。

「でも、今だつて戦争みたいなもんじゃないか」

「えっ!？」

「防空頭巾の代わりにマスクして」そう言いながら、中条君が本のある場所を指差した。

「僕たち、誰かと闘っているの?」

「コロナっていう未知のウイルスじゃないか。世界中で五百万以上の人が死んでさ」

「……そっか」と言つたものの、僕は中条君の言つたことがうまくのみ込めなかつた。

だつてウイルスは目に見えない。僕の近くにコロナで亡くなった人もいない。自分たちを焼き殺しにやつてくるB29のほうが怖いじゃないか、と思つたからだ。

その夜、僕は夢を見てうなされた。

夜空にたくさんB29が飛んでくる。空襲警報なんて聞いたこともないけれど、火事のとときのサイレンのような音が遠くから聞こえる。防空頭巾をかぶつた僕は、家族と離れてしまい、一人、たくさん人の波にもまれていた。火を避けて歩く

けれど、すぐ傍で家も人も燃えていて、夢なのにその熱を感じた。父さんも渚さんも海君もいない。たった一人でどうしたらいいんだろう。海君は無事なのだろうか。そのとき、知っている顔が見えた。母さんだつた。母さんだけが昔の、じゃなくて、今の服装で、防空頭巾もかぶらないで、まるで仕事に行くみたいに早歩きで歩いている。母さんの上に焼夷弾が落ちる。母さんの体が火につつまれる。

「母さん! 母さん!」

僕は涙をこぼしながら、叫び、そして目を醒ました。

僕の声が大きかったのか、子ども部屋のドアが開かれ、父さんが僕のベッドに近づいた。

「どうした、想……」

父さんが僕のベッドに腰をかける。リビングのほうから海君の泣く声が聞こえる。まるでサイレンみたいな大きな声だつた。

「僕、母さんに会いたい」

母さんというのはつまりは渚さんではない。父さんもすぐにそのことに気づいたようだつた。父さんが僕の頭を撫でながら言う。

「II 今度の日曜日には会えるじゃないか……」

「もつとたくさん、もつとたくさん会いたいんだよ……」

僕は子どもみたいに泣いた。

父さんは困つた顔をして僕の顔を見ている。だけど、それが僕の本当の気持ちだつた。

(窪美澄「星の随に」)

問一——線部1「大人みたいなことを言うんじゃないやありません！」／怒ったようにそう言うと、おばあさんはそう言ったことを後悔したみたいに唇を軽く噛んだ」とあるが、この時の「おばあさん」の気持ちとして最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 子どものうちから大人のように周囲に気をつかっているのを心配には思うが、そうせざるを得ないのかもしれない。「僕」を強く責めるのもよくないと思った。

イ 子どもなのだから大人の自分をもっと頼ればよいとは思うものの、事情もよく知らないのに「僕」のことを理解しているかのような発言をしたことを反省した。

ウ 大人びたことを言っても結局子ども一人ではどうすることもできないとは思うものの、必要以上に責め立てたことで「僕」を傷つけていないか不安になった。

エ まだ子どもの「僕」が大人みたいに自分より家族のことを優先して苦しむ必要はないと思うが、力になれる保証もないのに説教がましく言ったことを悔やんだ。

問二——線部2「死んだあとにこんなに残されてもねえ」とあるが、この時の「おばあさん」を説明したものとして最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 壁を埋めつくし、テーブルの上まであふれる本を、夫がそのままにして死んでしまったことを迷惑に思っている。

イ 自分にとっては何の意味もないが、本好きだった夫が大切にしていた本を処分することもできず持て余している。

ウ いやでも死んだ夫のことを思い出させる本を、こんなにもたくさん残していったことを、うらめしく思っている。

エ 夫の残したたくさんの古い本を前にして、自分を残して先に死んでいった夫のことをしみじみと思いつけている。

問三——線部3「……しょうい、だん？」とあるが、ここで「焼夷弾」をひらがなで表記することで、どのようなことが表わされていると考えられるか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア まだ小学四年生である「僕」には、「しょういだん」の意味は分かっても、それを漢字で書くことはできなかったという事。

イ 「僕」は焼夷弾が「東京の下町」を焼き尽くすほどの爆弾であることに驚きを感じ、頭の中が真っ白になっているという事。

ウ 「しょういだん」という音がどういうものを指すのか「僕」には分からず、頭の中で具体的にイメージできていないという事。

エ 「僕」にとつて戦争は「あまりに遠すぎる」できごとだったので、焼夷弾のことについてもあまり興味はわいていないという事。

問四——線部4「僕は黙ってしまった」とあるが、それはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 「おばあさん」が「火の雨」の夜を体験したのが自分とほぼ同じ歳の頃だったと知り、それに比べてささいなことでも悩んでいる自分のことが情けなくなったから。

イ 「おばあさん」が焼夷弾の雨の中を逃げまどう体験をしたのが自分と同じくらいの歳だったと知り、その事実を圧倒されて言葉が出てこなかったから。

ウ 「おばあさん」が空襲の時の傷として見せてくれたものが本当に空襲の時の傷なのか疑問に感じてしまい、そのことが気になって頭がいっぱいになっていたから。

エ 「おばあさん」は恐ろしかった空襲の夜の体験をどうしてわざわざ絵に描き続けるのか聞きたいが、それをどう聞いていいのか分からなかったから。

問五 ——線部5「今、描かないとみんな忘れてしまう気がして」とあるが、どういう気持ちを言葉にしたものか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 夫が死んで独りになってしまった今、自分がどのような人生を歩んできたのかを、絵に描くことで記録として残したいという気持ち。

イ 戦争を知らない「僕」に空襲の夜のつらい思い出を絵に描き残そうとする気持ちは理解できないと思い、はぐらかそうとする気持ち。

ウ 歳とともに失われつつある記憶の中で、自分の人生に大きな影響を与えた空襲の夜のことだけは記憶にとどめておきたいという思い。

エ あの空襲の夜の体験を、戦争を知らない「僕」のような世代に伝えていくことが、自分のように歳をとったものの役割だという思い。

問六 ——線部6「もしかして僕のために買ってくれたのかな、とも思って、うれしくなった。だって、佐喜子さんは僕がこの部屋に来ることを嫌がっていないんだと思って」とあるが、「僕」が「うれしく」感じるのはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分の家では受け入れられていないと感じることも多かったが、佐喜子さんが自分を喜んで迎え入れてくれたことで、自分がいてもよい場所ができたような気がしたから。

イ 一緒に暮らしている渚さんにはうとまれていたが、それをよく思っていない佐喜子さんがとても優しく接してくれたことで、自分にも味方ができたような気がしたから。

ウ 自分の家には居場所と呼べるところがなかったが、佐喜子さんが嫌がらずに自分を招き入れてくれるようになったことで、この部屋なら気がねなく過ごせる気がしたから。

エ 渚さんが愛情を持って接してくれているのは分かっていたが、佐喜子さんが自分を進んで部屋に置いてくれたことで、本当の愛情に触れることができた気がしたから。

問七 ——線部7「なぜだか僕の足も火傷をしたみたいに鈍く痛んだ」とあるが、「僕」がそう感じたのはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 空襲を描いた漫画本をきっかけにして、自分と同じような歳に火傷を負った佐喜子さんのことを思い出した「僕」は、その気持ちを深く理解するために当時の佐喜子さんになりきろうとしていたから。

イ 漫画本によって火の海になった空襲の夜の様子が具体的に目に浮かび、これから起きるかも知れない戦争で、佐喜子さんと同じように足に火傷を負いながら町を逃げまどう自分の姿が想像されたから。

ウ 漫画本の絵から空襲の夜の東京の様子が分かり、佐喜子さんに限らず多くの人が火の海の中で逃げまどい苦しんでいたことを思うと、同じ東京にいる自分も他人事とは思えなくなってきたから。

エ 空襲を描いた漫画本を見て佐喜子さんの体験がなまましく想像され、今の自分と同じくらいの歳だったこともあって、当時の佐喜子さんと現在の自分とが重なるような感覚におそわれたから。

問八 ——線部8「今だって戦争みたいなもんじゃないか」・9「僕は中条君の言ったことがうまくのみ込めなかった」とあるが、「中条君」と「僕」はそれぞれ「今」と「戦争」についてどう考えているか。次の中から適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 中条君は「今」人々がコロナから身を守るために使っているマスクは、「戦争」の時の防空頭巾と同じようなものだと考えている。

イ 中条君は「今」も「戦争」も世界中でたくさん死者が出ているという点で同じようなものだと言っている。

ウ 「僕」はウイルスの姿が目に見えない「今」よりも、B29が人々を焼き殺しにくる「戦争」の方が怖いと感じている。

エ 「僕」は死者がそれほどいない「今」よりも、たくさん人が死ぬ「戦争」の方が明らかに怖く感じている。

問九 ——線部10「その夜、僕は夢を見てうなされた」とあるが、「僕」はなぜこのような夢を見たと考えられるか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 戦争が以前より身近に感じられるようになり、大切な人の命を奪う戦争に対する恐怖と、大切な人が急にいなくなってしまうことに対する不安とが重なって意識されるようになってきたから。

イ 佐喜子さんや中条君と話をするうちに、戦時中と現在の状況とが似ていることが分かり、自分や大切な家族が戦争に巻き込まれている光景を容易に思い浮かべられるようになってきたから。

ウ 佐喜子さんの火傷の痕を見たことで、戦争の残した傷痕を現実のものとして感じるようになり、海君の泣き声をサイレンの音だと勘違いするほどに戦争のことを考えるようになってきたから。

エ 未知のウイルスよりも目に見える形で人の命を奪う戦争の方が恐ろしいと感じており、現実には戦争が起きてしまったときに、自分一人だけで家族を守れるのかどうか心配に思うようになってきたから。

問十 ——線部11「もっとたくさん、もっとたくさん会いたいんだよう……」／僕は子どもみたいに泣いた」とあるが、この時の「僕」は、いつもの「僕」とどのような点で違っているか。いつもの「僕」がどうであるかということにふれながら、八〇字以上、一〇〇字以内で説明しなさい。

二、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

言語習得の研究によれば、子供が母語を習得する過程はしばしば、「現象を一般化して仮説を立てる」↓「仮説を検証する」↓「仮説を修正する」というプロセスをたどるらしい。¹一般化というのは、観察した現象から、より普遍的な法則性を見つけて出すことだ。

たとえば、二歳ぐらいの子供にその子が見たことのない物体の名前を教えると、子供はそれをその物体に固有の名前（つまり固有名詞）ではなく、それと形の似た物体すべてに共通する呼び名（普通名詞）だと思いつくという。つまり犬を見たことのない子供に「これはイヌよ」と教えたら、子供はそこから一般化を行って「この動物に似た動物はみんなイヌなのだ」という「法則（仮説）」を導き出すわけだ。仮に同じ状況で「これはポチよ」と教えても同じことが起こるが、そこで導かれる「この動物に似た動物はみんなポチなのだ」という間違った仮説は、後に修正されていくらしい。

²この「一般化」↓「検証」↓「修正」というプロセスは、科学の営みそのものだ。子供は無意識のうちに、自然科学が世界を法則の集まり（＝理論）によってモデル化すると同じ方法を使って、母語に内在する法則性を発見し、体系化する。「ことばの発達を謎を解く」（ちくまプリマー新書）の著者である今井むつみは、同書の中で「子どもは言語を学習することで、科学に欠かせない思考方法を小さな時から訓練している」と述べている。³自覚があるとなかろうと、科学的に世界を捉えようとする傾向はすべての人間に備わったもの、と考えて良さそうだ。⁴

実際、大人を見ていると、「人間は法則を見つけてるのが好きなんだな」と思うことが多い。私たちは科学者でなくとも、自分の身の回りで観察した出来事を「単なる個別の出来事」として片付けず、たいていはその奥にありそうな法則性を導き出す。たとえば病院なんかで受付の人の態度が無愛想だったとき、もしかしたら無愛想なのはその人だけかもしれないのに、「この病院の職員はみんな無愛想なんだな」などと思ったりする。近年よく非難の的になっている「主語の大きい発言」も、自分の経験からより広い法則性を導こうとする精神の働きの表れだろう。⁵

私たちの頭の中には、過去の経験から見出した「世の中は／人間は／人生はこういうものだ」という法則がたくさん詰まっている。もちろんそれらは自然科学の法則とは違って多くの矛盾や曖昧さを孕んでいるし、そもそも言葉にすらなっ

ていないものも多いだろう。しかしある程度は科学の理論と同様に「システム」をなしているに違いない。つまり、それぞれの法則がただ別個に存在するのではなく、相互に作用しながら、私たちの判断や意思決定に影響を及ぼしていると思う。そういったものは普通「世界観」や「人生観」などと呼ばれるものだが、ここでは「個人が世界について見出した数多くの法則性から構成された体系」であることを強調するために、あえて「世界の理論」と呼ぶことにする。

私は文学作品を読むとき、しばしば自分の中の「世界の理論」の働きを感じる。どうやら私は、作品の中に書かれたことを諸々と受け入れながら読んでいるのではなく、^a ヨウシヨウヨウシヨで自分の中にある理論とすりあわせながら読んでいるようだ。きっと他の人もそうだろう。これは、科学者が科学の論文を批判的に読むのと少し似ているように思う。科学の論文が自然に関する理論や法則、実験結果などを厳密な言葉で記述するのは異なり、文学作品の中で語られるのは主に、具体的な出来事や、作者や登場人物が経験する感情などだ。だがそれらは、私たちの頭の中にある「世界の理論」に働きかけ、⁸ そこから何らかの「予測」を引き出す。

かなり単純な例をあげると、もし小説や物語の中に極悪非道な行いをする人物がいたら、私は「こんなことをする人間は後で罰を受けるに違いない」などと考える。それは、自分の中にもともとあった「悪いことをする人間は罰を受けるものだ」という法則から導かれる予測だ。そういった予測が出てくれば、それを検証するために先を読みたくなる。

人間の持つ「自分の予測の正しさを確かめたい」という欲求には、並々ならぬものがあると思う。それは小説や物語を読み進める原動力になるし、クイズやなぞなぞ、またテレビ番組の「CMの後、驚きの事実が！」などといった煽りも、そういった欲求を利用していると言える。ただ、私が面白いと思うのは、クイズなどの場合は自分の予測が的中すると得意な気持ちになるのに、文学作品の場合は「もし予想どおりだったらつまらないな」と感じることだ。おそらく文学作品に向き合うときは、自分のありきたりな予測を裏切ってほしい、自分に何か新しいことを発見させてほしいという期待があるのだろう。科学においても、従来の理論に新しい知見を付け加えなければ研究としての価値が認められないので、このへんは共通しているかもしれない。

文学作品が与えてくれる「発見」は多様である。今まで自分の知らなかった事実を教えてくれる作品もあれば、自分の中でぼんやりとしか認識していなかった法則性を明確にしてくれる作品もある。また、文学作品を読むことで、自分にはない、他人の「センサー」の働きを疑似体験することもある。科学の営みにたとえれば、観察に使うキキを変えるのに伴って、自然現象の見え方が変わるような感じだ。寺田寅彦の随筆は、科学者の目を通した「もの見え方」を鮮やかに教えてくれる作品の好例だろう。私は柴崎友香の小説を読むと、そこに描かれる「見え方」に影響され、読んだ直後には目に入るものすべてが彼女の小説に出てくるケシキのように感じることもある。

文学作品によって、自分の持つそれとは大きく異なる「世界の理論」に触れることもある。たとえばエイモス・チュツオーラ『やし酒飲み』の中で展開される物語は、一見すると突飛で非現実的だが、何かしら不思議な「まとまり」があり、その奥にある作者の世界の豊かさを感じさせる。単に突飛なだけで「まとまり」を感じさせない文章には、作者の「世界の理論」を担う力はないだろう。そういう力を持っているかどうかというところに、文学作品とそうでないものとの分かれ目があるように思う。

ただし、著者の「世界の理論」を表現する文章がすべて文学的かという点、そうではない気がする。たとえば自己啓発書などにおいては、しばしば「人間とはこういう存在だ」とか「人生はこうだ」といった直接的な言葉で著者の世界観が語られるが、そういったものにはあまり「文学」を感じない。その根底には、「個々の人間の持つ『世界の理論』は、言葉ではとうてい語り得ない」という、言葉に対する絶対的な不信感があるように思う。これは、自然科学が「言葉に対する信頼」をゼンティとして普遍的な法則を記述しようとするのとは対照的だ。そういった意味で、少なくとも私にとつての「文学」は、本来言葉では語り得ないものをどうにか言葉で表現しようとする、非常に野心的な営みであると言えそうだ。

(川添愛「科学と文学について自分なりに考えてみた」『季刊アンソロジー』二〇二二年夏季号)

問一 〰〰〰線部 a ~ e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二——線部1「一般化というのは、観察した現象から、より普遍的な法則性を見つけ出すことだ」とあるが、どういうことか。本文にある「イヌ」の例から「一般化」を説明したものととして最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。なお、「普遍的」とは「すべてのものにあてはまる」という意味で使われている。

ア「これはイヌよ」と教えられたら、その名前は目の前のその一匹だけを指す名前なのだろうと考え、同じ特徴を共通に持つ動物は一般に何と呼ばれるのか探究するのが「一般化」である。

イ「これはイヌよ」と教えられたらその一匹だけを「イヌ」だと思って済ませるのではなく、それと共通する特徴を持つ動物が他にもいるに違いないと考えてそれを探そうとするのが「一般化」である。

ウ「これはイヌよ」と教えられたら、その名前が固有のその一匹だけを指し示す言葉なのか、あるいは似た特徴を持つすべての動物を指し示す名前なのかを総合的に考えるのが「一般化」である。

エ「これはイヌよ」と教えられたら目の前のその一匹だけを「イヌ」と考えるのではなく、共通する特徴を見つけてその特徴を持つすべての動物が「イヌなのだ」と考えるのが「一般化」である。

問三——線部2「この『一般化』↓「検証』↓「修正』というプロセスは、科学の営みそのものだ」とあるが、この一文を通して筆者が読者に気づかせようとしていることは、どのようなことだと考えられるか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 言語習得の過程では無意識のうちに仮説が修正されるということ。

イ 科学の営みとは現象を一般化し仮説を立て検証することだということ。

ウ 言語習得のプロセスと科学の営みには共通する点があるということ。

エ 母語は「一般化」↓「検証」↓「修正」という過程で習得されるということ。

問四——線部3「科学的に世界を捉えようとする」とあるが、どういうことか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分の身の回りで起こる出来事の意味を、自然科学の法則にあてはめながら考えようとする。

イ 過去の経験から見出した法則をまとめ、その法則の集まりを通して世界を理解しようとする。

ウ 「一般化」↓「検証」↓「修正」というプロセスを使って、短時間で世界を捉えようとする。

エ 科学の営みと同じプロセスをたどることで習得した言語を通して、世界を認識しようとする。

問五——線部4「すべての人間に備わったもの、と考えて良さそうだ」とあるが、なぜそう言えるのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 母語を習得するプロセスはすべての人間が経験することだから。

イ すべての人間にとって科学の法則は常に正しいものであるから。

ウ 現代社会において自然科学はすべての人間に関わるものだから。

エ すべての人間にとって母語習得の過程は科学の営みそのものだから。

問六——線部5「主語の大きい発言」とあるが、どのような発言をいうのか。次の中からその具体例として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア アメリカの国土は広い。

イ 日本人の平均寿命は、男女とも世界一である。

ウ 日本人は勤勉で、まじめによく働く。

エ 人間はみないつか死ぬ。

問七——線部6「自分の中の『世界の理論』の働き」とあるが、「世界の理論」が働く時、「自分の中」でどのようなことが起こっているのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が世界から見出してきた多くの理論が、目の前にある世界を科学的に捉えることを可能にしている。
- イ これまで自分が読んできた文学作品の示す世界観が、新しく文学作品を読んだ時の気持ちを決定している。
- ウ 文学作品の中で語られる出来事や登場人物が経験する感情が、自分に何らかの発見をもたらしている。
- エ 過去の経験から導き出した様々な法則が、互いに関係し合いながら自分の思考や感情に影響を与えている。

問八——線部7「自分の中にある理論とすりあわせながら読んでいる」とあるが、どういうことか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 物語中の出来事、登場人物の動きや心理を自分の中の法則と比べ、この先物語がどう展開するかを考えながら読んでいくこと。
- イ 物語世界の法則と自分の中の法則を比べ合わせて、その物語の登場人物の考え方や行動を批判しながら読んでいくこと。
- ウ 物語世界から読み取った法則に照らして、その物語がどう展開し、登場人物がどう行動していくかを予測しようとすること。
- エ 物語や登場人物のもつ法則に影響を受けて自分の中の法則を修正し、自分が今後どう生きていくかを考え直そうとすること。

問九——線部8「そこから何らかの『予測』を引き出す」とあるが、この「予測」は読者にどのような影響を及ぼすか。

次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 読者の中に「予測」が生まれると、そのあと自分の「予測」を的中させたいという気持ちが生まれ、その気持ちによって読書に向き合う時の真剣さが増していく。
- イ 読者の中に「予測」が生まれると、その「予測」が合っているか確認したいという気持ちが生まれ、その気持ちによって本を読み進めたいという意欲が強まっていく。
- ウ 読者の中に「予測」が引き出されると、それがすぐ「予想どおりだったらつまらないな」という気持ちに変わり、新しい知見を示してほしいという欲求が高まっていく。
- エ 読者の中に「予測」が引き出されると、その「予測」を導いた自分の「法則」の正しさを確かめたいという欲求が生まれ、もっと先を読みたいという気持ちになっていく。

問十——線部9「このへんは共通しているかもしれない」とあるが、どのような点が「共通」しているのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア ありきたりで古い考え方を捨てることで、従来のものとは異なる誰も予測しなかった新しい発見をしたいと望む点。
- イ 話の続きや研究の結果を予測したときに、それが本当に的中すると次の展開を見届ける気を失くしてしまう点。
- ウ 常識や型にはまった結果が得られること以上に、自分の予測に意外な事実が付け足されることに面白さを感じる点。
- エ 予測した通りになったりありふれた展開になったりすることよりも、何かが新しく分かることに価値を見出す点。

問十一——線部10「あまり『文学』を感じない」とあるが、筆者にとって「文学」とはどのようなものだと考えられるか。

本文全体をふまえ、「発見」という言葉を必ず用いながら、六〇字以上、八〇字以内で答えなさい。

